

称号及び氏名	博士（人間科学） 中原 由望子
学位授与の日付	平成27年3月31日
論文名	高齢男性のセクシュアリティと男らしさ
論文審査委員	主査 田間 泰子
	副査 浅井 美智子
	副査 宮脇 幸生
	副査 東 優子

要旨

本論文「高齢男性のセクシュアリティと男らしさ」は、現代日本において高齢男性自身がセクシュアリティをどのように生きているのかを社会学的に考察するものである。

セクシュアリティは、人間であることの重要な一側面としてあり、生物学的性差(sex)、性自認(gender identity)、性的指向(sexual orientation)、エロティシズム、性役割(gender role)、親密性等が関わって構築されている(WAS Declaration of Sexual Rights 2014)。セクシュアリティは生涯を通じて重要なものであるから、急速に高齢者が増加する日本では高齢者のセクシュアリティも彼／彼女たちの生の質(Quality of Life)の保障の一環として尊重されねばならない。

そこで、本論文では、対象を異性愛の高齢男性に絞り、次の3つのリサーチクエスション：①高齢男性が生きる現代日本は、高齢男性についてどのような性シナリオ(誰がいつ誰と性的関係をもつべきか)をもっているのか、②高齢男性は、自らのセクシュアリティをどのように捉えているのか、③高齢男性が表明する②は①とどのような関係にあるのか、を立てた。そして、(1)社会規範を析出するためのメディア言説分析と、(2)高齢男性自身を対象としたインタビュー調査という手法をとった。(1)(2)いずれにおいても、本研究は、社会規範は人々の言説によって構築され改訂され続けているという社会構築主義的立場に立つ。これらのデータから、高齢男性のセクシュアリティがジェンダー・アイデンティティや性役割、親密性等とどのように関わっているかを分析し、また現代日本社会と高齢男性との間にみられる齟齬の内実を明らかにし、実生活において高齢男性がどのようにしてこの齟齬を克服しているのかを考察した。

本論文では、以下のように論じていく。

第1章では、本論文の目的、研究方法、先行研究から見出した課題と論文構成を述べ、男性のセクシュアリティに関連する先行研究を概観した。まず、ジェンダー・アイデンティティや男らしさ、性役割に関する理論的研究を整理し、セクシュアリティがジェンダー・アイデンティティや男らしさと深く関わる社会的関係構築の実践であることを明らかにした。また、セクシュアリティは、寝食と同様に人間にとって生涯を通じて非常に重要な生の一部であるが、先行研究から、セクシュアリティは年齢に関する社会規範と大きく関わっており、高齢者にはセクシュアリティが不必要であるかのような規範をもつ文化や社会が少なくないことを示した。

第2章では、日本を対象を絞り、これまで日本において実施されたセクシュアリティに関連する実証研究の整理を行った。日本では、高齢男性のセクシュアリティに関する研究は少なく、高齢男性のジェンダー・アイデンティティに関する研究はほとんど見当たらない。このような研究の状況は、高齢期男性に対してはセクシュアリティ行動を抑制することを求めるような社会的要請と、社会的文脈を共有しているのではないかと推測された。なお、数少ない高齢男性のセクシュアリティ調査においては、高齢男性がセクシュアリティを希求していることが明らかにされている。

第3章では、第2章で明らかにした研究状況の背景、および高齢男性のセクシュアリティ経験の社会的文脈として、現代日本の高齢男性に関する性シナリオがどのようなものであるかを探るため、マスメディアの記事を分析した。分析対象は、国際高齢者年の前後約20年間について大宅壮一文庫所蔵の大衆誌での検索から発行部数の多い上位2誌を選んだ結果として、『週刊新潮』『週刊ポスト』(1990年～2012年)でキーワード「高齢者」「性」「恋愛」等によって検索した記事53本である。分析の結果、高齢男性に関して、①期待されるセクシュアリティは若い男性のセクシャルな欲求を規準としてそれを下回るものと想定され、②性シナリオには年齢区分はないが、③社会は高齢男性のセクシュアリティの実践に対して一定の制限を設けている、というように、セクシュアリティの規範が年齢規範の影響を受けて現代日本に流布していることを明らかにした。特に近年は科学的な文脈を利用する言説が支配的である。こうした「常識」がメディアによって再生産され、高齢男性はその言説を内面化し、それらがジェンダー・アイデンティティやセクシュアリティの行動に影響を与えている可能性を示唆した。

第4章と第5章では、当事者に対するインタビュー調査によって得られたデータをもとに、高齢男性が自らのセクシュアリティをどのように捉えているか、ということに焦点を当てて分析した。対象者はスノーボール・サンプリングによって調査に合意を得た男女14人(63～77歳。2009年当時。うち、配偶者有り4人、配偶者無し10人)(第4章)と、男性6人(63～72歳。2009～2013年当時。うち、配偶者との離別者3人、死別者3人)(第5章)で、1人当たりおよそ2時間～4時間の半構造化インタビューを実施した。その結果、高齢男性が表明したセクシュアリティや男らしさに関する理想像は、社会においては年齢規範に影響されたセクシュアリティの規範によって抑圧される傾向にあるため、理想的なセクシュアリティを実践するために様々な戦略を必要とすることを明らかにした。より具体的には、男性的魅力を磨くこと(若々しく男らしい外見の維持、稼ぎ手であった頃と同様な経済的庇護者という役割、男性としての肉体的性的能力等々)が、男として幸せに生きることを構成しており、彼らの幸福はこのような男としての幸せと密接に関連している。ジェンダー・アイデンティティは男らしさ(男性としての性役割)の実践に支えられており、その不可欠な一部としてセクシュアリティが利用されているので、高齢男性に対して年齢規範に影響を受けたセクシュアリティ規範によって社会的に変更が要請されても、男性に意識においては高齢期に入った後にも変更され難いのである。

また、男女高齢者のセクシュアルな関係に対する意識差、および離別のケースと死別のケースで親密な女性の位置づけに大きな違いがあることを明らかにした。

第6章では、高齢男性のセクシュアリティについて、理論的な概念を用いながら考察を行った。高齢男性たちのセクシュアリティと、社会が期待する高齢男性のセクシュアリティとの齟齬は、ジェンダー・アイデンティティに不安定をもたらす可能性がある。しかし、インフォーマントらはゴッフマン(Erving Goffman)が示す戦略に類似する策で、自身がセクシュアルな存在であり続けるための独自の策を用意し、実践することによってジェンダー・アイデンティティを安定状態に維持していた。また自認するだけでなく、男らしさを親密な女性に示し受け入れられること、若い男性やより経済力のない男性たちとのヘゲモニーにおける差異化、さらに地域社会など周囲

の人々のまなざしから自らのセクシュアリティを隠ぺいし「高齢者」として振る舞うことによって安定させている。

以上から、①現代日本社会の性シナリオとして、社会が高齢男性のセクシュアリティを全面的に肯定しておらず、高齢男性に求める一定の抑圧的な社会規範がある、②セクシュアリティはジェンダー・アイデンティティと性役割に密接に結びついていて、高齢男性自身は高齢期になったからといって自己のセクシュアリティの意識を変化させ難い、③高齢男性は社会規範に抵抗する独自の戦略として、様々な自己を装い演出することによって、社会規範にそぐわない欲求を彼らなりの独自の方法で具現化しようと試みている、ということが出来る。

本論文の独自性としては、男らしさやセクシュアリティ研究においてこれまで軽視されがちであった高齢男性に焦点を当てたこと、および高齢男性本人の意識を聞き取ったことが挙げられる。これにより、高齢男性が自らのセクシュアリティをどのように生きているかということ、その意味世界や様々な戦略として明らかにすることができた。

とりわけ重要な知見は、男性がセクシュアリティと男らしさを密接に関連付けてとらえていること、男らしさを完結させるために親密な女性の存在を希求していること、そういった女性を獲得するために独自の努力を行っていること、そして親密な女性との離死別といった関係性の相違から男性間に多様性があることを明らかにした点である。

この考察結果から、高齢男性にとって、親密財とされる女性との生活は社会的セーフティネットや社会関係の結節点の意味を含んでおり、幸福がジェンダー・アイデンティティに密接にかかわっている男性にとっては、男として男らしい人生を送るということと女性の存在は高い関係性をもっているということが出来る。そのため、女性に「モテる」能力は男性にとって大変重要なもので、彼らはその能力を高めるための努力を怠らないのである。

他方で、高齢男性たちは社会的なステレオタイプに真向から逆らうのではなく、親密な女性との関係を隠す等の行いによって、結果として社会的なステレオタイプを高齢男性自身も再生産し続けているということが出来る。

残された課題として、第一に日本社会において、高齢男性のセクシュアリティ意識を尊重するための社会態度や受け入れ方の具体策を講じる必要がある。しかし第二に、セクシュアリティの尊重という点からすれば、本論文で高齢男性の立場から親密財とされた女性や、性的に多様な高齢者についても研究し、セクシュアリティが尊重される社会を希求することが必要である。第三に、セクシュアリティに深く関わる事が明らかとなったジェンダー・アイデンティティと性役割についてはその関係性をさらに考察する必要がある、特に日本では性役割が固定的で女性の貧困等の問題に直結していることから、それを尊重・維持することが将来的に人々に幸福をもたらすのかどうか、他国との比較研究等を含めてさらなる検討が必要である。

学位論文審査結果の要旨

1) 研究テーマが絞りこまれている。

中原由望子著『高齢男性のセクシュアリティと男らしさ』（以下、「本論文」とする。）は、現代日本における高齢男性のセクシュアリティについて、雑誌記事分析とインタビューを通して考察することにより、抑圧的な社会規範の存在を明らかにし、規範をめぐる高齢男性のさまざまな営為とその機能を論じた研究である。第1章では分析の基本概念となるセクシュアリティや男らしさ等を先行研究をふまえて定義したうえで研究テーマを明確化し、第2章では日本社会における高齢男性研究からより具体的に研究課題を導出した。第3章では研究テーマにかかわる社会規範の一端として雑誌記事分析を行い、第4章では高齢男性による意味づけを高齢女性のそれとの差異により浮き彫りにした。第5章では、高齢男性同士にも多様性があることを明らかにしたうえで、第6章では総合的に高齢男性のセクシュアリティの社会的構築の様相を考察している。よって、本論文は研究テーマが明確に絞り込まれているといえる。

2) 論文の方法論が明確である。

本論文は、先行研究として数多い量的調査を踏まえたうえで、それらとは異なり高齢男性の意味世界を捉える目的で社会構築主義の立場を選択した。第3章では雑誌記事分析から、高齢男性のセクシュアリティにかかわる社会規範の変容を構築主義的に捉えた。第4章では高齢男女へのインタビュー分析、第5章では高齢男性へのインタビュー分析を行って意味世界を明らかにしたのち、第6章ではE. ゴッフマンの社会的アイデンティティ他の理論的考察を加えている。よって、分析視点は一貫しており、論文の方法論は明確である。

3) 研究テーマについての先行研究調査を十分に行っている。

関連する先行研究調査として、高齢者研究、セクシュアリティにかかわる研究、男らしさにかかわる研究を渉猟しており、十分に先行研究調査を行っている。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

研究対象となる基本文献や公的統計資料を十分に吟味している。また、収集した雑誌記事は23年間127誌をレビューしたのち、選定した53本についてKJ法を用い、さらに年次別推移等から十分吟味してその変容を捉えている。インタビューは、スノーボール・サンプリングによって収集した20人のデータについて、配偶者との関係性、家族観、社会的ネットワークその他を幅広く聴取したうえで、男女間の見解の相違、配偶者と死別した男性と離別した男性との相違を考察し、さらに第6章でそれらを総合的に考察するなど、十分に吟味しているといえる。

5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

本論文は、第一に高齢男性のセクシュアリティを考察するというテーマ設定において、第二にセクシュアリティを人として尊重されるべきものと位置付けつつもジェンダー論の視点から「男らしさ」をめぐる権力構造に深く関連するとする視座において、第三にそのための分析方法として先行研究のほとんどないインタビューを選ぶという点において、先行研究にはない独創性を有している。また、分析結果としてもたらされた新しい知見としては、第一にセクシュアリティが戦後日本社会で男性として生きた高齢者たちのアイデンティティに深くかかわって重要なものと意味づけられており、高齢になってもそれは変化しないこと、第二にそのようなセクシュアリティは男性同士の関係性や女性との関係性における権力構造として実現されていること、第三に

高齢男性は抑圧的規範を感じつつも、セクシュアリティにかかわる行為の隠ぺい等を行うことによって自らその規範を再生産していること、を挙げることができる。以上から、本論文は、高齢男性のセクシュアリティとジェンダーについて、先行研究にない新しい知見をもたらしたといえる。

6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

本論文の全章を通じて、議論は確かな実証をともなっており、その知見は複数の章の考察を第6章で統合的に考察することによってより確かなものとなっている。たとえば、第2章での考察によって予測された高齢男性への抑圧的社会規範は、第3章の雑誌記事分析において歴史的変容がありながらも存在し続けていることが明らかにされ、第4章と第5章のインタビューでは高齢男性たち自身の言葉でマスメディアの記事への言及として裏付けられる。さらに第6章においては、それらの関連性がメタレベルで分析されている。よって、必要にして十分な議論と実証が展開されているといえる。

7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

上記5)で述べた本論文の新しい知見は、日本において急速に増加する高齢者への新たな理解をもたらすとともに、今後解決されねばならない多くの課題を示唆するものである。よって、当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、多くの点で独創性を備えた論文である。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は本論文を博士（人間科学）の学位に値するものと判断する。